



SDGs 達成に向けた「日本の祭りと生物多様性保全プロジェクト」教材

てんてこ祭りから考える 三河湾流の農業と漁業

第1章 | てんてこ祭りに使われる陸と海の供物とは？

てんてこ祭りとは？

五穀豊穡を祈念するお祭りは、数多く存在します。毎年正月3日に行なわれる『てんてこ祭り』もそのうちの1つです。

てんてこ祭りが行われる八幡社は、愛知県西尾市熱池町神田にあります。平安時代(西暦859年)に清和天皇の大嘗会の悠紀齋田にこの地が選ばれたことにちなんで始まった祭りといわれています。熱池(にいけ)は、もとは贅(にいえ)池と書き、供物を意味する贅を意味します。神田と共に、悠紀齋田に関係した地名となります。

赤い衣装に身を包んだ6人の男が神社に向けて行列し、うち3人は男根を模した大根を腰につけ、「てんてこ、てんてこ」という太鼓の囃子にあわせて腰を振って奇妙な格好で神社に向かいます。この所作は、穀物と人の生殖の重ねて表したものとされています。

神社の境内に着くと竹箒で藁灰を撒き散らしますが、これは肥料を施すさまを表したものとされています。祭りの儀礼食の中になますがあり、大根とボラを用います。

出典：西尾市教育委員会事務局文化財課 <https://www.city.nishio.aichi.jp/sportskanko/bunkazai/1001485/1001609/1001670/1002754.html>
 栃原きみえ, et al. "矢作川の流域における祭礼と服装についての調査(第4報): 三河万歳 西尾のてんてこまつり." 名古屋女子大学紀要 14 (1968): 1-12



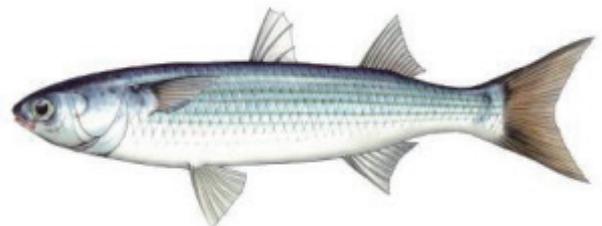
出典：西尾市観光協会 <http://nishiokanko.com/list/shop/tentekosai>

ボラと大根

てんてこ祭りでも使われているボラは、成長段階で呼び名が変わる出世魚です。ハク(3cm前後)、スバシリ(10cmくらいまで)、オボコ(5~18cm)、イナ(10~25cm)、ボラ(30~40cm)、トド(40cmもしくは50cm以上)と変わります。「イナ」の由来は「稲」からきており、若魚や稚魚で田んぼにも入ることからとも云われています。

大根は、アブラナ科だいこん属の植物です。ルーツは諸説ありますが、地中海地方や中東が原産で古代エジプトから食用としていた記録があるようです。日本で栽培が盛んになったのは江戸時代に入ってからで、地方ごとに品種改良が盛んに行われました。

出典：ぼうずコンニャクの市場魚貝類図鑑 <https://www.zukan-bouz.com/syu/%E3%83%9C%E3%83%A9>
 北陸農政局 <https://www.maff.go.jp/hokuriku/seisan/engei/tokusan201610.html>



出典：あいちのおさかなBOOK2018
<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/257812.pdf>



出典：つくっちゃおう【宮重だいこん】 <https://www.pref.aichi.jp/nogyo-keiei/nogyo-aichi/tukuchaou/bbs-data/358394/index.html>

第2章 | 農業と漁業

西尾市の農業

西尾市がある岡崎平野は、矢作川の上流から運ばれた土砂によって形成されました。上流は崩れやすい花崗岩が多く、土砂とともに運ばれた栄養豊富な土壌により、弥生時代から米づくりが行われました。

西三河に広がる碧南台地の標高は低いですが、水路を引くことが難しかったため、農業は発達していませんでした。

1880年に矢作川の水を豊田市から取水した明治用水が開通したことにより、碧南台地が潤され、明治用水の完成と農家の努力により、愛知を代表する農業地帯となりました。

出典：「愛知の農業」2017年度版 <https://www.pref.aichi.jp/nousei/img/aichinogyo2017.pdf>



西尾市の漁業

三河湾は、いくつもの中小河川の流入があり、知多半島と渥美半島に囲まれた内湾のため、川から流れた栄養が行き届きます。それにより魚介類の成育も良く、古来より三河湾では、漁業が盛んです。

しかし、愛知県の漁業全体を見た際に、海での漁業が全体の半分以上を占めますが、近年は漁獲量が大きく減少しています。

愛知県での漁獲量は、マイワシが非常に多く、最盛期には総漁獲量の半分以上を占めていましたが、その後に激減し、2015年頃から再び増加しました。しかし、他の主要魚種では、アサリは大幅に減少し、イカナゴは漁獲がありません。

出典：愛知県碧南市 https://www.city.hekinan.lg.jp/soshiki/keizai_kankyo/nogyo_suisan/1/4964.html
水産業の動き2021 <https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/398525.pdf>



出典：碧南市 https://www.city.hekinan.lg.jp/soshiki/keizai_kankyo/nogyo_suisan/1/4964.html



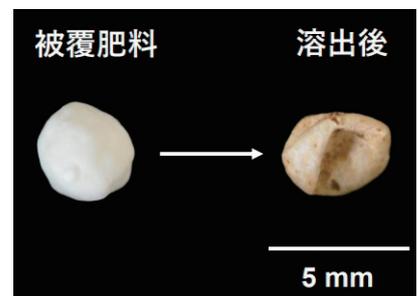
プラスチックごみの問題とは？

近年、海洋に蓄積されるプラスチックごみが、深刻な問題となっています。プラスチックごみの海洋への経路として、河川が挙げられます。様々なプラスチックがごみとして流れますが、その一つに被覆肥料というものがあります。

被覆肥料とは、肥料が溶ける量や溶ける時期を調節するため、プラスチック等で肥料成分を被覆したものです。しかし、使用後の被膜殻がほ場から海洋に流出していることが問題となっています。

海洋プラスチックごみは、時間が経つにつれ、次第にマイクロプラスチックと呼ばれる微細片となります。マイクロプラスチックは、漂流の過程で汚染物質が表面に吸着してしまうため、化学汚染物質の海洋生態系へ取り込まれる原因になる可能性があります。

出典：中国四国農政局 <https://www.maff.go.jp/chushi/seisan/kankyo/hifuku.html>
令和元年版環境・循環型社会・生物多様性白書 <https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/r01/html/hj19010301.html>



出典：令和2年度海洋プラスチックごみ学術シンポジウム http://www.env.go.jp/water/b-1_katsumi_ishikawa_pref_univ_upload_rev.pdf



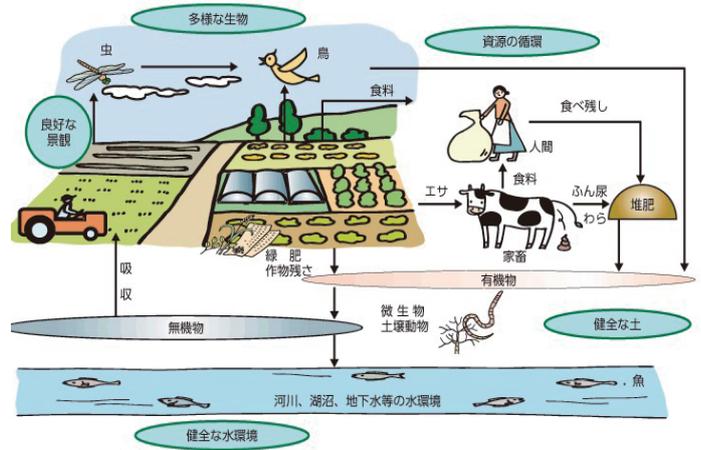
第3章 | 環境への配慮

持続可能な農業とは？

農業は、自然の循環機能の一部を担っています。適切な農業を行った場合には、里山と言われるような二次的な自然環境を形成します。

農業と環境は相互に影響を与えているため、場合によっては、環境への負荷や二次的自然環境の劣化を招くなどのおそれがあります。

肥料や農薬などの使用の際に、環境負荷の軽減に配慮することは、持続可能な農業へとつながります。



出典：農林水産省 平成24年度 食料・農業・農村白書 https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h24_h/trend/part1/chap3/c3_8_01.html



考えてみよう！

Q 1. ワークショップでは、昔から続いてきた『てんてこ祭り』という文化に関わりのある体験をしました。これからも続いていくためには、どうすれば良いと思いますか？

A. _____

Q 2. 農業と漁業の共通の課題として、プラスチックのごみ問題がありました。持続可能ではないものの例として取り上げた被覆肥料ですが、解決するにはどうすれば良いと思いますか？

A. _____

Q 3. ワークショップでは、三河湾流域について、さまざまな要素を学びました。SDGs(持続可能な開発目標)の17ゴールとのつながりをいくつ見つけることができましたか？



キーワード:

大根、ボラ、農業、肥料、プラスチックごみ、漁業、三河湾、歴史、矢作川、明治用水、など。



A. _____ 番:内容 _____ 。 _____ 番:内容 _____ 。
_____ 番:内容 _____ 。 _____ 番:内容 _____ 。
_____ 番:内容 _____ 。 _____ 番:内容 _____ 。

第4章 | ワークショップ開催報告 (2022年3月27日(日)10時~16時30分)

第1部 祭り与自然を知ろう

西尾市きら市民交流センターを拠点として、ワークショップを開催しました。第1部では、てんてこ祭りの保存会長である高橋正治氏より、てんてこ祭りの概要や祭りで使用される道具などの説明についての講演がありました。

口伝により受け継がれてきたことや、腰に取り付ける男根に模した大根の木型などの特色ある説明があり、てんてこ祭りの由来である太鼓の囃子を実際に叩いたり、行進の際の所作の実演もありました。



第2部 現場に行こう

祭りについて知った後には、てんてこ祭りがおこなわれる八幡社へ移動をしました。保存会長の高橋氏の案内のもと、参拝及び視察をおこないました。

八幡社の見学後には、西尾市で有機肥料を使った大根を栽培している大島農園へ移動をしました。農園主の大島晋栄氏の案内のもと農園の視察及び大根の収穫体験をおこないました。



第3部 ボラと大根を食べよう

センターに戻って、大島農園主による講演を聞きました。環境と健康に配慮した手作り有機肥料のこだわりや農業の現状について学びました。

その後、東幡豆漁業協同組合長の石川金男氏による話題提供があり、海洋プラスチックごみの現状等の漁業の課題について学びました。

大根とボラについて学んだ後に、祭りで奉納される大根とボラの『なます』の調理と試食をおこないました。さらに、祭りの際に使用される、男根を模した大根の彫刻をおこないました。



第4部 三河湾を見よう

矢作川と三河湾の恵みの歴史を学ぶにあたり、塩で栄えた吉良町(西尾市)について学べる「吉良饗庭塩の里」へ行きました。塩田の歴史等について学びました。

その後、海岸へ移動して、海を目の前にして、三河湾の地形や持続可能性を考えました。てんてこ祭りから視る文化、大根から視る農業、ボラから視る漁業を振り返り、『てんてこ祭りから考える三河湾流の農業と漁業』のワークショップを終えました。

